

探訪
75

開削の主導権者

山田河内(那珂川町山田)の盆地は、裂田溝がつくられる前は東高西低の土地で灌漑用の水源が乏しい所でした。那珂川の水が、盆地の西端を3メートルほど侵蝕して崖をつくり、川の水が低い所を流れていたため、そのままでは灌漑用水として利用できませんでした。

裂田溝 2

そこで、現在の伏見神社の前に一の井手を築いて、川を堰きとめ、那珂川の水を裂田溝に導いたのです。

この一の井手は、昭和62年（1987）に近代的な井堰に改築されて昔の面影は残っていませんが、往時は長さ八十三間（約150m）あり、筑前國最大の大井手であったと「筑前國続風土記」に記されています。

では、一説によると、四世紀後半から五世紀初頭ごろに築かれたと言われる一の井手や裂田溝の大工事を誰が行ったのでしょうか？このことは、裂田溝のような大規模な土木工事に、主導権を持つ有力な豪族がこの地に存在したのかという問題にも繋がってきます。

江戸時代の国学者、青柳種信
(1766-1835)が「筑前
國統風土記拾遺」の中で「村東
に大塚とて有、里人は現人塚と
云、仲村の現人大明神の古宮の

跡と云。崇有^{たたリ}とて里人恐れて近づかず」と記していますが、これは現在、下梶原と安徳にまたがる安徳大塚古墳を指しています。

この古墳は、福岡平野の最も奥にある丘陵の眺めのいい所につくられています。全長64m、濠の部分を含めると約81mの大規模な前方後円墳です。埴輪が出土していることから、築造された当初は埴輪が古墳の周囲を取り囲み、みかげ石のふき石に覆われていたと思われます。当時は陽光に輝き、どこからでもこの場所を見ることができたでしょう。

現在、那珂川町には国指定の史跡はありませんが、安徳大塚古墳は国指定の価値があると文化庁の見解も出ています。また、この古墳は学術的にも貴重なもので、那珂川流域でも古い時代に築造され、福岡市の老司古墳（国指定）につぐ大きな古



現在の安徳大塚古墳(東隈から撮影)



県が発掘調査した当時(昭和45年)の安徳大塚古墳
(安徳から撮影)



県が発掘調査した当時(昭和45年)の
安徳大塚古墳(上梶原から撮影)

安徳大塚古墳に眠る人こそ、裂田溝の土木工事を施工し、大和政権と深いかわりがあった豪族ではないだろうか？と考古学者の森貞次郎先生は「北部九州の古代文化」「神功皇后と裂田溝」の中で述べられています。

れていますが、木棺の一部が残
っていました。この木棺は、密
内¹の特色が強く、このことから
安德大塚古墳の主が、大和政権
と強いかわりがあったことが
調査結果から推測されます。
安德大塚古墳の本格的な発掘
調査は行われていません。裂田
溝の開削に主導権を持った人

安徳大塚古墳は福岡県文化課が、一部、発掘調査を行っています。調査によると、高さ6.5mの後円部の頂上に大き

物は、果たして誰だったのでしょうか？今後の考古学的調査研究に深い期待と関心が寄せられます。

※畿内：歴代の皇居が置かれた大和・山城・河内・和泉・摂津の五畿内をいう

